

**<オリエンテーション>****A. テーマ：キリスト教思想の基本文献を読む**

キリスト教思想を理解し、研究するには、その基本的な文献を広くまた深く読むことが必要である。この演習では、近代以降のドイツ語による文献を精読することによって、キリスト教思想研究に必要な文献読解力の向上をめざす。

今年度は、昨年度のテキスト（ティリッヒのアメリカ亡命初期の講義録）からフランクフルト時代に遡り、次のテキストによって、演習を行う。

**B. テキスト**

Paul Tillich, *Vorlesungen über Geschichtsphilosophie und Sozialpaedagogik* (Frankfurt 1929/30), (Ergänzungs- und Nachlaßblände zu den Gesammelten Werken XV, De Gruyter, 2007)

**C. 成績などについて**

- ・平常点による。（受講者には、数回の発表担当を課するが、その発表内容と、毎回の演習への参加度とから総合的に判断する。）
- ・使用するテキストについては、コピーを配布する。
- ・参考文献：授業中に紹介する。
- ・受講生には、キリスト教思想に対する関心と積極的な授業参加（参考文献による復習を含め）を期待したい。質問は、オフィスアワー（火3・水3）を利用するか、メール（アドレスは、授業にて指示）で行うことができる。

**D. 授業（予習＋出席・発表＋復習）の進め方****1. 演習参加者の役割**

- (1) 授業前：読み・訳す・分析する → 問題点・補足事項。
- (2) 授業での発表：順番に読み・訳す。質疑。討論。
- (3) 授業後：残った問題を検討する。

- ・前期半期：4/12, 19, 26, 5/10, 17, 24, 31, 6/7, 14, 21, 28, 7/5, 7/12, 19
- ・次回：4月19日は、「導入講義2」を行い、メンバーと担当の確定を行う。  
演習は4月26日から開始。12回。

**<導入講義1> 日本基督教学会『日本の神学』58、掲載予定。**

書評メモ：菊地順『ティリッヒと逆説的合一の系譜』聖学院大学出会、二〇一八年。

本書は、著者である菊地順氏が、一九九二年～二〇〇九年にかけて、主に『聖学院大学論叢』に掲載した諸論文をまとめた専門研究書であり、氏の長年のティリッヒ研究の集大成である。この優れたティリッヒ研究書の刊行を、同じくティリッヒ研究に関わってきた研究者の一人として喜ぶたい。以下確認するように、本書は独立した論文を収めただけの論集ではなく、全体がよく練り上げられた構成になっており、序論に示された目的と方法

に基づいた明晰な論述と手堅い分析が展開されている。学会誌で広く学会員に紹介すべき研究成果と言えよう。

この書評では、本書について、特にその注目すべき内容を紹介し、その後、書評者としてコメントを述べることになるが、同じティリッヒ思想を研究してきた者として、内容紹介においても随時論評を差し挟み、コメントをやや詳しく行いたい。

まず本書序論では、ティリッヒ研究の動向を参照しつつ、本書の目的・関心と方法が示されるが、その際に、「本書の関心」として、次の三つの問いが立てられる。

「(1) ティリッヒの弁証学的神学の中核をなすと考えられる〈逆説的合一〉の内実とは何か、(2) 〈逆説的合一〉はどのような仕方ですりッヒ神学の中で中核的位置を占めているのか、(3) 〈逆説的合一〉は、キリスト教思想史において、特にティリッヒが自ら属すると語っている「アウグスティヌス的フランシスコ的伝統」に合致しているのかどうか。」(二〇頁。以下、頁数のみ記載)

本書はこの三つの問いに取り組むことによって、「ティリッヒ神学の本質と特質を明らかにするとともに、その現代的意義を尋ねること」をめざしており、それは、本書の構成を規定している。第Ⅰ部「ティリッヒ神学の特質」は第一の問い(ティリッヒ神学の基本的意図・内実・構造)を論じており、第Ⅱ部「ティリッヒ神学と逆説的合一の思想」では第二の問い(ティリッヒ神学の形成史・発展史)が扱われ、第Ⅲ部「ティリッヒ神学と逆説的合一の系譜」のテーマは第三の問い(キリスト教思想史におけるティリッヒ神学)にほかならない。よく練り上げられた構成である。本書では、これらの問いを解明するために、ティリッヒ自身のテキストの丁寧な分析がなされ、特に、ティリッヒの自伝、伝記などに示された個人史に留意しつつ、ティリッヒの説教を思想研究と結びつけた点に著者の慧眼が示されている(特に、第6章の本文で取り上げられた説教「妥協してはならない」の扱いは印象的である)。

各部の内容を順次検討してゆく前に、本書のキーワードを整理しておきたい。これまでの説明から明らかなように、本書の中心的なキーワードは「逆説的合一」であるが、これは弁証学的神学、関係性の神学、総合、信仰義認論、恩恵の神学といった一連の用語と結びつけられており、これらによって展開される本書のティリッヒ解釈は、次のようにまとめられる。すなわち、ティリッヒ神学はその意図・目的に従って弁証学的神学(キリスト教弁証をめざす神学)と規定され、それは関係性の神学(神と人間との)という形式を有し、逆説的合一とはこの神学の論理にほかならない。それを神学内容に即して言えば信仰義認論あるいは恩恵の神学と言うことが可能であり、キリスト教思想史における総合の試みと評することができる。序論の以上の議論を念頭に、次に、本書の内容を概観してゆこう。

## **第一部 ティリッヒ神学の特質**

### **第1章 ティリッヒ神学と「聖なるもの」**

### **第2章 弁証学的神学の理念**

### **第3章 弁証学的神学の構造**

### **第4章 実存主義的特質**

## **第二部 ティリッヒ神学と逆説的合一の思想**

### **第5章 初期ティリッヒにおける二つの原理と総合への道**

第6章 信仰義認論（一）——その背景と思想

第7章 信仰義認論（二）——恩寵としてのプロテスタント原理

第8章 認識における恩寵——存在論的認識の優位

第三部 ティリッヒ神学と逆説的合一の系譜

第9章 ティリッヒとアウグスティヌス——受動的逆説と能動的逆説

第10章 ティリッヒとルター——神秘主義をめぐって

第11章 ティリッヒとフランシスカニズム——〈coincidentia oppositorum〉

終論